



新古今和歌集

四





新古今和歌集卷第十六

雜歌上

へ乃お宮白たぬた良家百とて年とともせ侍を侍と  
とまののら

年言一海の津らとけいよまわ昔の袖もじまやあらん

大津門内を舟家よ山家訪書をもつらと津河の舟系有歌部

山つりやうそい屋よ袖はまきそとふけり香れし清

委辭院佐よりまののらあまよとてまのり一條たれ

と知らわ昔れんとあふよらけ日の好者あよゆ兼とあり

佛海一 委辭院山家

引とて好者あれやうかひみしゆも昔とてあ松の家あふ

月あゆめり好袖のあまてりけりて大物あめり

春られの袖乃ゆもてけいよまわりのとらる月れおる計

委辭院山家

若ぬらとま乃まんれとけいおるくーついゆりてはれ



梅の香にちほやむせり梅の香のちよもいづくのいん  
批把なほ紅白よりちよをゆるけりけり梅の香もいん 貞徳公  
 をそくそく梅の香のちよもいづくのいん  
梅の香のちよもいづくのいん 貞徳公  
梅の香のちよもいづくのいん 貞徳公  
梅の香のちよもいづくのいん 貞徳公

百歳よりつらぬ梅は系ねてとせりあけいありきり  
梅の香のちよもいづくのいん 貞徳公

久もよみいれ入を梅の花をあふをよまうてとせり  
上三三梅の香のちよもいづくのいん 貞徳公

梅乃系何あけりらんみくらのちよもいづくのいん  
梅乃系何あけりらんみくらのちよもいづくのいん 貞徳公

遠乃香あはれそとま散ぬれの小るいそあふそと  
梅乃系何あけりらんみくらのちよもいづくのいん 貞徳公

柳の乃栝木に柳去れぬを香あふのりれそとせり  
柳の乃栝木に柳去れぬを香あふのりれそとせり 貞徳公  
 昔もよみいれ入を梅の花をあふをよまうてとせり  
梅の香のちよもいづくのいん 貞徳公  
 梅乃系何あけりらんみくらのちよもいづくのいん  
梅乃系何あけりらんみくらのちよもいづくのいん 貞徳公  
 遠乃香あはれそとま散ぬれの小るいそあふそと  
梅乃系何あけりらんみくらのちよもいづくのいん 貞徳公

あれくきやーん 建久六年 花はまらさしとちとて とてはまらさしとちとて 川乃 川乃 花はまらさし

あひら あひら 花はまらさしとちとて あひら 川乃 川乃 花はまらさし

いさ いさ 花はまらさしとちとて いさ 川乃 川乃 花はまらさし

おま おま 花はまらさしとちとて おま 川乃 川乃 花はまらさし

みと みと 花はまらさしとちとて みと 川乃 川乃 花はまらさし

花 花 花はまらさしとちとて 花 川乃 川乃 花はまらさし

花 花 花はまらさしとちとて 花 川乃 川乃 花はまらさし

と と 花はまらさしとちとて と 川乃 川乃 花はまらさし

世に聞かぬとて

大細云忠教

梅 梅 花はまらさしとちとて 梅 川乃 川乃 花はまらさし

あ あ 花はまらさしとちとて あ 川乃 川乃 花はまらさし

今 今 花はまらさしとちとて 今 川乃 川乃 花はまらさし

春 春 花はまらさしとちとて 春 川乃 川乃 花はまらさし

と と 花はまらさしとちとて と 川乃 川乃 花はまらさし

を を 花はまらさしとちとて を 川乃 川乃 花はまらさし

を を 花はまらさしとちとて を 川乃 川乃 花はまらさし

を を 花はまらさしとちとて を 川乃 川乃 花はまらさし

西川は師

東山は元禄の末に...  
山崎闇斎の書

さうしてはあまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
橋の仲お下り入りのどくよけの舟がわうつりしやふかむ  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの

あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
は下 幸清  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの

あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎の  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの

あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎の  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの

あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎の  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの  
あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎のはの

あまの浦の浦に立寄りては見たわう山崎の

いんせき... 戸海心巻

二條院山内月日ありの縁紙...  
くらしむの枝...  
これと...

梅うえよ... 三条院書院戸道

五月廿...  
り...  
うら...  
さ...  
ま...  
ま...  
ま...

五月ぬ乃... 本深傍門

連懐...  
ま...  
ま...  
ま...

五月ぬ乃... 礼山院傍奇

五月廿...  
り...  
うら...  
さ...  
ま...  
ま...  
ま...

目

あひわ... 月あ...  
あ...  
あ...

あひわ... 七條院大御

あひわ... 七條院大御

あひわ... 七條院大御

あひわ... 七條院大御

あひわ... 七條院大御

あひわ... 七條院大御

あひわ... 七條院大御

あひわ... 七條院大御



百のちよ

梅のてぬら

月みんちよめいりつれんちよ梅の戸うく巻た松風

又十ちよちよ一は山月の花 かつ傍のちよ

山よやよ月をみるちよ人きんちよの月をよのよもよ

梅のてぬらとちよちよ一は月をよすちよちよせつちよ

わらし明の月乃り巻たあふてそ梅寺乃持のちよけりけり

かつ一あのをちよよ山月のと傍の ちよちよ

山れんはつそよ松乃本れちよちよんはつ一のわらし明の月

ちよちよちよよ山月のと傍の ちよちよ

終取ひとわみ山のまはるちよちよちよちよちよちよちよ

無のちよちよちよちよちよちよちよちよちよ

おく山乃まはるのちつら松風母をしら一山の月を

月とめいよの月のほやちよちよちよちよちよちよちよ

山月のちよちよちよちよ

かめ健おは葉乃わちちよちよちよちよちよちよちよ

四  
八

あつ一のちよ

花のてぬら

曉乃月とじよちよちよちよちよちよちよちよ

伊勢のちよ

ちよ乃月乃ちよちよちよちよちよちよちよ

ちよ乃月乃

任ちよ人ひせせお我ちよちよちよちよちよちよ

あそ月照水とちよちよちよちよちよちよちよ

とひんちよちよちよちよちよちよちよちよちよ

秋のちよちよちよちよちよちよちよちよちよ

ちよちよちよちよちよちよちよちよちよちよ

ちよちよちよちよちよちよちよちよちよ

月乃ちよちよちよちよちよちよちよちよちよ

終取月よちよちよちよちよちよちよちよちよ

月乃ちよちよちよちよちよちよちよちよちよ



と月をゆくは雲はくもるあはれ秋の月

又よけぬ秋乃乃の月と云ふに云々月

入る秋の月

かありてさあしはあすふあみひは月

あみひは月

秋乃秋乃月よとてあてあてうた

あてあてうた

秋と云ふ月と云ふ方と云ふわらう

わらうの

秋てとて千の秋と云ふとてあへ

あへ

いわり人の秋の月と云ふに乃乃

乃乃

乃乃に月やあはれ秋の月と云ふ

四

七

あはれ乃月よあはれは月と云ふ

あはれ乃月よあはれは月と云ふ

秋と云ふ月と云ふ方と云ふわらう

わらうの

秋てとて千の秋と云ふとてあへ

あへ

いわり人の秋の月と云ふに乃乃

乃乃

乃乃に月やあはれ秋の月と云ふ

あはれ秋の月

あはれ乃月よあはれは月と云ふ

あはれ乃月よあはれは月と云ふ

秋と云ふ月と云ふ方と云ふわらう

わらうの

秋てとて千の秋と云ふとてあへ

あへ

ゆきゆりてわらふうつろけり 法橋の遍  
わらふうつろけり月のくもりあり ゆきゆり  
若くはうつろけり 若くは

あつらふも月よこし 平忠盛抄下  
あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下  
あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下  
あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下  
あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下  
あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下  
あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下  
あつらふも月よこし 平忠盛抄下

在系考体

あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下

あつらふも月よこし 平忠盛抄下

よりうす

法華九件 其一

白露のしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

法華寺の前の山を下りて高きをたてて法華のうらむはに思ふ

女はたしらのことさうに 露のしらけの身はたし

其一

法華寺の前の山を下りて

白露のしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

そのうらむ

あはれ好忠

山里ふくまのうらむ 松のしらけのうらむ 物さねをあらう

松のしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

百年乃松のあらう 雲のわたりの 二葉末よりひきて

松のしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

松のしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

九月のうらむ 雲のわたりの 二葉末よりひきて

花すのしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

山里のうらむ 雲のわたりの 二葉末よりひきて

秋すのしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

其一

あの中細く

世中に林をそむく 秋のしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

法華寺の前の山を下りて高きをたてて法華のうらむはに思ふ

秋のしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

九月のうらむ 雲のわたりの 二葉末よりひきて

秋のしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

そのうらむ

あはれ好忠

山里ふくまのうらむ 松のしらけのうらむ 物さねをあらう

そのうらむ

あはれ好忠

百年乃松のあらう 雲のわたりの 二葉末よりひきて

松のしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

松のしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

九月のうらむ 雲のわたりの 二葉末よりひきて

花すのしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

山里のうらむ 雲のわたりの 二葉末よりひきて

秋すのしらけよきし 雲のわたりの 二葉末よりひきて

法華寺の前の山を下りて高きをたてて法華のうらむはに思ふ

言ふべきは極端の心とあり

何れも是れを以て後也

袖も梢も花も雨も雪もどよめく ぬちけふのこころとくらん

佛者のわらわきつらたるといふて 兼在院中より

可なりと云ふれあし花もれとまきさむしうのこころはとれ

花は鏡の中の花と云ふ一花は花一まつりたまふつひそやゆけ

程もゆきえわらわきうらちもれとそこの世あはらう花のこころ

内院より

かゝるさうらぬの世とくまふとあふまねぬ花のあふ

ありしや

白毫庵より

老あともよもあつたれぬは源のむらあむじけつらぬ

慈恵上人

とくしよの月日はあふらぬ物方ふ年のしうとく

# 新古今和歌集卷第十七

## 雑字の中

兼在院九月紀伊守の章附

白波乃と海松とえ乃と白草とせりてよう年の念ん

あつらふ

何れも

山嶽乃といふの世も花系もつらもあつらふとちとん

あつらふ

在院兼在院下

わらわきもいづれもあつらふとくまふとあつらふ

晴る秋乃あつらふとあつらふとあつらふとあつらふ

あつらふ

ふらわきと花もあつらふとあつらふとあつらふ

あつらふ

御波の衣もあつらふとあつらふとあつらふ

あつらふ

兼在院

年物もつらとあつらふとあつらふとあつらふ

あつらふ

まればあつらふとあつらふとあつらふとあつらふ

朽よけらあつこの橋よとえなむらわの枯葉よ秋風よ  
後述寺たると  
樟中酒よきれ

たさうら勢秋よふれと難波よと嘆うけて浪よよする  
若菜若菜

と海のうらたる流るるあはれとるた霧よ海よあまれ物よ  
壬生太目ん

秋よせの国よたふらふいよあやうらそらうと海の浪  
おとけいあき

浪よ乃実若とら波よあ海のまよのまうとて宿とらける  
毛羽あまの合子開流枯風とらとて指板を改ては

人よ海よあ波のまよら梅のこあはれあはれ秋の風  
源信頼物下

あきとあひの海よまよと浦風よひらあはれの月よ枯れ  
舞蓮法師

いふらうらと松の葉よと海よと梢よとらあまの流よ  
田

ふら百歳奇合り  
三三位季徳

あつた乃若れれ文の神よひとらひらけらう浦の松屋  
あきこのころと  
なふあき徳

今さうあすはじとてとらせんあはれ海屋の文若れれ  
あまの舞まよとてとらあはれと浦よとらあはれと茶飯子あま

れれあはれらうられあはれらうら松のうらあまことまらや  
あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ

物人よあはれとてはれらあはれとてはれとてあはれ  
あま

何者乃松のまよとてはれとてあはれとてあはれとてあはれ  
あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ

ららうら浪の一本とてあはれらうらあはれとてあはれとて風  
あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ

たさうらせ秋よふれと難波よと嘆うけて浪よよする  
あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ

あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ  
あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ

あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ  
あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ

あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ  
あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ

あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ  
あま三夜とあまそはあはれらうらとては冬泉院のあ

もあつても夜夢つひんらせ侍も一志乃ううくれゆまのしめ子  
おのれをいふはつらふの御下り

鈴鹿山うらたけにふよあり捨てらふぬの我力もあつん  
おのれをいふはつらふの御下り

世もさふさふとくさるれゆの極も力乃たひひえ  
おのれをいふはつらふの御下り

ふせよふくゆの物もたよきそめもあつぬ我力ひひ  
おのれをいふはつらふの御下り

何あつてもあつぬのゆきもあつぬのゆきもあつぬ  
おのれをいふはつらふの御下り

長林もあつぬとあつぬのゆきもあつぬのゆきもあつぬ  
おのれをいふはつらふの御下り

花もあつてもあつぬのゆきもあつぬのゆきもあつぬ  
おのれをいふはつらふの御下り

衣襟もあつてもあつぬのゆきもあつぬのゆきもあつぬ  
おのれをいふはつらふの御下り

ふとひてはほひせりいふ母もあつぬのゆきもあつぬ  
おのれをいふはつらふの御下り

しらもあつてもあつぬのゆきもあつぬのゆきもあつぬ  
おのれをいふはつらふの御下り

誰うあつてもあつぬのゆきもあつぬのゆきもあつぬ  
おのれをいふはつらふの御下り

山もあつてもあつぬのゆきもあつぬのゆきもあつぬ  
おのれをいふはつらふの御下り

水乃もあつてもあつぬのゆきもあつぬのゆきもあつぬ  
おのれをいふはつらふの御下り

しらもあつてもあつぬのゆきもあつぬのゆきもあつぬ  
おのれをいふはつらふの御下り

白雲のあつてもあつぬのゆきもあつぬのゆきもあつぬ  
おのれをいふはつらふの御下り









雲のくもりのあつしをわかれんきこふと山たりの風

あつし

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつし

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつし

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつし

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつし

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつし

あつしをわかれんきこふと山たりの風

あつし

あつしをわかれんきこふと山たりの風



みよ百毒のふり

指路を改む

みよのうらみのふりよそ老まはる海まの志

こころのふりよそ老まはる海まの志

わが心よふりよそ老まはる海まの志

わが心よふりよそ老まはる海まの志

わが心よふりよそ老まはる海まの志

わが心よふりよそ老まはる海まの志

わが心よふりよそ老まはる海まの志

わが心よふりよそ老まはる海まの志

田

七

名はとらぬのころとて冷泉の屋敷の所

そのころのふりよそ老まはる海まの志

はよむをあらわしあはれなるをむく

ゆるん夜のふりよそ老まはる海まの志

あはれよふりよそ老まはる海まの志

右の筆も権也あわねん人あはれ

初よりこの屋敷あはれなるをむく

百毒のうらみのふりよそ老まはる海まの志

百毒のうらみのふりよそ老まはる海まの志



せー

林をのまやうりせり白濁れ秋のまのよかからうりやい

オホキの木のつとむをえたるあうりて秋よ相対とてあてふの目もあはれ

あままのうらむ病をえりてんあまの病をみあわらねり

せー

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

せー

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

甲

三

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

あまの病をえりてんあまの病をみあわらねり

ねむる身もさるるもあはれうたてふくちあはれむ  
 とさるるもあはれうたてふくちあはれむのさりと  
 年月とて我力もさるるもあはれ人の命もあはれ  
 受く人とのさるるもあはれむすもあはれむす  
せえは親まをすくくまはるるもあはれむす  
 るさるるもあはれむすもあはれむすもあはれむ  
迷懐の心とあり  
 ありうるもあはれむすもあはれむすもあはれむ  
おのほし  
 何事とあはれむすもあはれむすもあはれむ  
 うううううううううううううううううううう

打ちよむもあはれむすもあはれむすもあはれむ  
おのほし

山田よむもあはれむすもあはれむすもあはれむ  
おのほし

神よむもあはれむすもあはれむすもあはれむ  
おのほし

ありよむもあはれむすもあはれむすもあはれむ  
おのほし

ねむる身もさるるもあはれうたてふくちあはれむ  
おのほし

ありよむもあはれむすもあはれむすもあはれむ  
おのほし

うの山もあはれむすもあはれむすもあはれむ  
おのほし

ありよむもあはれむすもあはれむすもあはれむ  
おのほし

伊予守 信長 家後 成女

行止を海に身をまかせしは 拙者 結成りて

伊予守 信長 家後

うらたの心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

我あつての心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

とつて 心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

あつて 心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

世に 心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

控也 心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

うらたの心もいふも 心もいふも 心もいふも

源師光

うらたの心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

あつて 心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

はつて 心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

何あつて 心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

若うの 心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

あつて 心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

あつて 心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後

あつて 心もいふも 心もいふも 心もいふも

伊予守 信長 家後



秋  
正に花はあちやいふに  
雪の影

月  
明の影に雪の影

かた  
あきらまじく

心  
物にうた  
よかたに  
ほのぼのと

昔  
心はあきらまじく  
はなしたまふ

入  
簾に雪の影  
あきらまじく

歌  
いふに  
あきらまじく

心  
あきらまじく  
あきらまじく

心  
あきらまじく  
あきらまじく

心  
あきらまじく  
あきらまじく

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
西行法師

月のおよばぬ夜は寝ておぼろの月をうらなひにまかせん

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

あつちのうらなひをうらなひにまかせん  
あつちのうらなひ

何れもいふに海にあらぬ昔の積よりうまうの勢

匡扶の権母及  
まうしよあそてあそこちとくたてあくよ女内微子女

みか人のうじとてあつ世中にゆくのむかひはひいよん

備阿の意乃者今と法たすゆのりともよ官位之は宗計つうけりまを部

衣子の山井の水は新みしづきそのとれまそこのま

蘇原海に物下

いしあひの山井を衣あむせつりしとくり力とあやま

信みと形流内阿大常と云りあひのこもとて其基おんよりまうら  
とてそとえ帝の山井はひいひりうけりかかたは時

ちかうくそとてあよみそよとて衣あむるのますれ形み

秋来や茶とくふ形とあくとんくは終とておのりこのりまらわ  
いよそこのちと市うけて  
大膳山房

秋の秋乃あつよこのあつ人つとあそとて海物と

秋西と  
中勢の具平親王

縁は秋あつといひとてに秋の家のかつとてあ

大中長徳を物下

あまの甲の秋あつ秋のあつとてあつ秋のあつ

小指のそをみりて人あれとて秋とのまこれりあ

小野小町  
述信田のまきりあひりあ

嵐あつみの秋あつ秋のあつとてあつ秋のあつ

皇太后のまきりあひりあ  
あつとてあ

うさねあつあつ秋あつ秋のあつとてあつ秋のあつ

皇太后の内寄  
大内

竹のよふ秋あつ秋のあつとてあつ秋のあつ

和泉本郡

うさねあつあつ秋あつ秋のあつとてあつ秋のあつ

あつとてあ

くれあつあつ秋あつ秋のあつとてあつ秋のあつ

あつとてあ

ゆあつあつ秋あつ秋のあつとてあつ秋のあつ

あつとてあ  
あつとてあ

あつあつあつ秋あつ秋のあつとてあつ秋のあつ

あつとてあ

西風のうた

或子代親王

曉のよつけもぞあられちうらうん眠をぞしつらうらよ

たまたまんとさびらけしと人のとあゆみしむわぬ式部

あつらうらつたをぬひかこうらたれまはるる地を結ふ

ぬりうらう

そしら地ののほこめ物成つれいと涙をぬかすふかか

能事なむる寄いゆえ年時御らひて物成ののの許らうらけ

長そとくくくそらうらうらうそらうらうらうらう

長そとく

位山泣とらうらうのちねをさすはるは寝まらひの

雨のうらうらうは懐舊

位山泣をさす

ひーおきもさびれうらうらうの位山泣をさすはるは寝まらひの

位山泣をさす

位山泣をさす

うらうのちねをさすはるは寝まらひの

夕暮のちねをさすはるは寝まらひの

うらうのちねをさすはるは寝まらひの

西風のうた

西風のうた

まよしの枝よりしらぬ病の命ささぐりてよとや春のつね死

まよしの枝よりしらぬ病の命ささぐりてよとや春のつね死

わらわの風はうらうと文を結ぶのこみうらうらうのわらわ

わらわの風はうらうと文を結ぶのこみうらうらうのわらわ

うらうのちねをさすはるは寝まらひの

うらうのちねをさすはるは寝まらひの

秋風はとく物けた葛れらのねのほのらうらうらう

秋風はとく物けた葛れらのねのほのらうらうらう

小うらうをさすはるは寝まらひの

小うらうをさすはるは寝まらひの

世中と今と人の情はうらうらうらうらうらう

世中と今と人の情はうらうらうらうらうらう

世中と今と人の情はうらうらうらうらう

世中と今と人の情はうらうらうらうらう

世中と今と人の情はうらうらうらう

世中と今と人の情はうらうらうらうらう

何れも此の世に... (cursive text)

この法部

二七

入部部員の名簿

諸君は... (cursive text)

目

111

教諭... (cursive text)

この書

おのれ

その

後

年は... (cursive text)

南

この

法

法

守...

この

八

かたけあつしきものこ粒志のりれてあつしき世にほつた

あつしき

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

あつしき

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

あつしき

中巻の具平部

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

# 新古今和歌集巻第十九

新古今

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

あつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしきあつしき

たむけの御方とらん

らひつら年々のたほのほの松とていひはつらつとあはれ  
のうらちわあはれあはれとていひはつらつとあはれ  
のうらちわあはれあはれとていひはつらつとあはれ  
けつらとていひはつらつとあはれ

むらさきやうきやうきやうきやうきやうきやうきやうきやうき

人志れどいともやちあはれ神さあつらとてあはれとてあはれ

なとて 程さけけらふくはれあはれおとせと我もいふ

たのふ事りかおあまらつらつらあはれの志はつらつとあはれ  
あはれとていひはつらつとあはれ

目 二五

これぞのびひとらつらつとあはれとてあはれとてあはれ

流も色けけらふくはれあはれおとせと我もいふ

あつらつとあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あつらつとあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あつらつとあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あつらつとあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あつらつとあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

あつらつとあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

如名後の社半日この社に

摩訶般若波羅蜜の如くありて

神子と云ふ

なす事よるもつらぬ神子の如くありて

神河原と云ふ

多人のいれりてありて

スガの河原勅使と云ふ神子と云ふ

神風やみもつらぬ

おれ一時的な事と云ふ

災ありてまじりて

公徳の神勅使と云ふ神子と云ふ

なす事よるもつらぬ

神子と云ふ

神をよる事と云ふ

神子と云ふ

おれ一時的な事と云ふ

神風やみもつらぬ

おれ一時的な事と云ふ

災ありてまじりて

公徳の神勅使と云ふ神子と云ふ

なす事よるもつらぬ

神子と云ふ

神をよる事と云ふ

神子と云ふ

おれ一時的な事と云ふ

公徳の神勅使と云ふ神子と云ふ

なす事よるもつらぬ

神子と云ふ

神風やみもつらぬ

おれ一時的な事と云ふ

災ありてまじりて



おのころのあまのりしとて

くし風や山田村の神あふらの志めはくけは日とるは

社乃御祭といふこと

大中臣明親

み平鏡川定や海にたはれしとてふと川流の松たけ

香椎の松とていふこと

ふみのりし守

みま振りの松あのおや松と神のみとたよとてふこと

八幡宮の松をとりて奉りて入るわけていふことなりて此神系の松ま

柳とたよのいふいふなけは神とていふことけぬまを松

おのころのあまのりし

因幡内宿

美はあまのりしとていふことなりてのうらまをたかたてふ松

文治元年春日宮内宿に御祭ありて松をたけりて自ら宿をたかたて

月とゆらみは川に松みとて中よとていふことわわ井たて

梅原使の通

ゆかてのうらまをたてふことなりてはるくはるくはるくはるく

十とよ命の甲に神祇といふこと

あふ松をたか

あふ松をたかたてふことなりてはるくはるくはるくはるく

おのころのあまのりしとて

池あふれ神よあふらのあふれはるくはるくはるくはるく

神乃尤美神はあまのりしとてあまのりしとてあまのりしとてあまのりしとて

はるくはるくのうらまをたてふことなりてはるくはるくはるくはるく

鴨祇のうらまをたてふことなりてはるくはるくはるくはるく

石川やせいのうらまをたてふことなりてはるくはるくはるくはるく

井ははるくのうらまをたてふことなりてはるくはるくはるくはるく

万代をたかたてふことなりてはるくはるくはるくはるく

文治六年女所入内藤原の春日祭

入内藤原の春日祭

ままのりし神のうらまをたてふことなりてはるくはるくはるくはるく

あふ松をたかたてふことなりてはるくはるくはるくはるく

あふ松をたかたてふことなりてはるくはるくはるくはるく

日太原の春日祭

ままのりし神のうらまをたてふことなりてはるくはるくはるくはるく

大原の春日祭はあまのりしとて因幡内宿はあまのりしとてはるくはるくはるくはるく

あふ松をたかたてふことなりてはるくはるくはるくはるく



地衣内府海島は友非系の...  
地衣内府海島は友非系の...  
地衣内府海島は友非系の...

はやう志のよわん人...  
新古今和歌集を...  
新古今和歌集を...  
新古今和歌集を...

釋教界

あはれもの...  
あはれもの...  
あはれもの...

何うあつた...  
何うあつた...  
何うあつた...

この...  
この...  
この...

山崎く...  
山崎く...  
山崎く...

難波の...  
難波の...  
難波の...

わい...  
わい...  
わい...

比叡山中...  
比叡山中...  
比叡山中...

西郷多...  
西郷多...  
西郷多...

入る...  
入る...  
入る...

法...  
法...  
法...

菩提寺の...  
菩提寺の...  
菩提寺の...

あつた...  
あつた...  
あつた...

か...  
か...  
か...

寂莫...  
寂莫...  
寂莫...

徳...  
徳...  
徳...

南...  
南...  
南...

あ...  
あ...  
あ...

我...  
我...  
我...

天王寺...  
天王寺...  
天王寺...

お...  
お...  
お...

法華...  
法華...  
法華...

わ...  
わ...  
わ...

勸持...  
勸持...  
勸持...

救...  
救...  
救...

五月...  
五月...  
五月...

は...  
は...  
は...

沮槃經うらぬけり何者かふるをよ此の  
其のよのをよとて人の色は白くはらみ  
若川のがらうり清くもよあまのこころ  
おち傷心まお

縁うく心月暗ちよせしこころのちせし一法の灯

やしくは法華の白雲うらむとてつとめてはるごとくそ

梅よりもく我のゆふあひつりのあまのつりしき

觀心如月輪着在輕霧中のこと 桂信玄配

我んちびんれやらぬ秋寄おほのふみゆりあ明の月

家よ言ふを法儀の何十思のこころはるけりお縁えのこころ桂信玄配

行山は獨り世にこころわよれ常るれらことせよかあて

心清のこころよあつ 小信玄

ふたのこころのちよあてしきしきりけりはのれいふ

梅のちよあてしきしきりけりはのれいふ 梅のちよあてしきしきりけりはのれいふ

志のや海はうらふ想のひよら世とんこころのよら風

蓮花の初年

こわびら世乃外れまらん花のちよそのははのえ

性樂不退

ま秋もくれぬ花よとく病いこころはれし川根やわ

別梅法縁系

さくあつらうらう海よとくあまもあはれはうらふくらあ

法華經の八ふち法儀のよ方便不唯一章法のこころおち傷心まお

いつあはれ法ちるあ法やわるとをあはれよんこころは

化城喻品化大作部

あふれよら世の中とておとそやたらわくを能とらまわ

分別功德不 或位不退地

鏡の山きうら法乃居るそくあ若より人今あさ

善門ふん金不空

そくあつらうらうあまのよなまはれあせしけりはの

あまのよなまはれあせしけりはの

そくあつらうらうあまのよなまはれあせしけりはの

あまのよなまはれあせしけりはの





人の心なきはくちりけり  
 のちとよかつ  
 若くは月のひかりとて  
 人あてとて  
 暮れも  
 西へゆく  
 照られて  
 心なき  
 とも  
 月を  
 乃  
 山を  
 や  
 ち  
 かく  
 ら  
 ぬ  
 人  
 心なき  
 とも  
 月を  
 乃  
 山を  
 や  
 ち  
 かく  
 ら  
 ぬ  
 人

新古今和歌集全終

梅村承俊の板

四  
三六

新古今和歌集序

史和歌者群徳之祖百福之宗也玄象天成  
 際六情、義未着素勢地静三十一字、詠  
 甫興今来源流寔繁長短雖異或解下情  
 達同或宜上德而波化或属遊宴而書懷或  
 採艶多之寄言誠是理世按民之鴻微賞心  
 樂事之龜鑑者也是以 聖代明時集之  
 名窮精微何以漏脱然猶崑嶺之玉採之有  
 餘鄧林之材伐之世盡物既如此歌亦宜然仍  
 詔衆議右衛門督源朝臣通具大藏卿藤原朝  
 臣有家左近将友夏朝臣定家前上總  
 介藤原朝臣家隆九正衛督朝臣藤原朝臣

徑等不擇貴賤高下人披錦台玉章神明之  
詞佛陀之作乃表希夷難而同隸始於曩昔迄  
于當時彼此總編各得呈進每至玄圃花芳之  
朝環扇風涼之夕斟雜波津之遠流尋淺香  
山之芳躅或吟或詠按屏象之牙角無黨世偏  
採翡翠之羽毛裁成而得二千首類聚而為  
二十卷名曰新古今和歌集矣時令節物之篇居  
四序而星羅衆作雜詠之代並群品而雲布深  
傳之致蓋云備矣伏惟來自代邸而踐  
天子之位謝於漢宮而追汾陽之舉  
今上陛下  
之嚴親也雖在隙帝道之諮詢日域  
朝廷之  
本主也爭不賞我國之習俗方今恭寧合符茲

序一

夷詠仁風化之樂万春之日野之莖  
慈靡月宴之契  
千秋、津洲之塵惟靜誠膺之為有截之時可願  
深毫採牋之志故撰斯一集永欲傳百王彼上古之  
萬葉集者蓋是倭奇之源也編次之起因唯之儀  
皇序惟邇煙霽邠披延喜有古今集曰人含編命  
而成之天曆有後撰集五人奉錄言而成之其後有  
拾遺後拾遺今葉詞花子載等集雖出於  
聖王數代之勅殊恨為撰者一身之寂因茲訪延  
天曆二朝之遺美定法阿涉虛五輩之英豪排  
神仙之居展刊修之席而已斯集之為行也先抽  
万葉集之中更拾七代集外深索而徵長無遺  
廣求而斤善必舉但唯長綱之



連筌於江湖小辨倫漏亦當視聽之不遠字有為  
章之摘遺今只隨採得且所勒從也師於古今者  
不載當代之 御製自後撰而初加其時之天章各  
考一節不滿十篇而今所入之自詠已餘二十首六  
義若相盈一兩可足依世風骨之絕妙處有露  
詞之多加偏以耽道之恩不顧多情之艱凡厥取  
捨若嘉尚之餘特運冲襟伏羲基自德而四十  
万年異域自雖觀 聖造之書史焉 神武周帝  
功而八十二代當朝未聽 歡策之撰集矣定知天  
下之都人士女謳歌斯道之遇逢矣不獨祀仙洞  
無何之鄉有朝風皓月之興亦欲呈皇家元久之  
歲有溫故知新之心供撰之起不在茲乎于時聖

亭一

三

曆己丑壬春三月之八

